

しおり
文学の葉

第9号
(2011年4月1日号)

映画の原作者

館長 佐木隆三

小学二年生（八歳）で敗戦を迎え、空腹を抱えて過ごす日常だったが、映画を観るときは満たされた。村に映画館などなく、小学校の講堂で上映するから、音響などお構いなしだけれども、それでも超満員だった。「出征兵士の家」に文学書など皆無だから、わたしが最初に出会った「文化」は映画にほかならない。

美空ひばりが同い年と知り、たちまち熱烈なファンになったが、どんな作品に熱中したかは、もはや記憶の果てである。いずれにしても、早熟な大スターだった。映画の題名を忘れたとはいえ、カラオケバーへ行くと、たいてい歌うことができる。

それから幾星霜、わたしの小説『復讐するは我にあり』が、今村昌平監督によって映画化されることになった。契約書を書いたとき、「主演は緒形拳でいこうと思う」と言われ、すっかり嬉しくなった。緒形さんが同い年であることは、早くから知っていた。それで初対面するとき、「昭和十二年生まれですよ」と念を押され、固い握手を交わした。なんで熱くなるのかは、未だわからないけれども……。

いろんな人から、「原作者としてのキャ

スティングですか」と問われたけれども、天下の大監督に、そんな口出しができるわけがない。「緒形拳でいこうと思う」と言われたときの感激は、いま原稿を書いても蘇る。だから平成二十年十月、緒形さんが七十一歳で亡くなった日は、一滴も酒を飲まずに夜を明かした。

いや、「映画の原作者」が、こんな感傷を連ねてよいものだろうか。しかし、映像と活字は基本的に異なる。試写会のあと今村さんが、「いやー、よう映るもんだと驚きました」と洩らしたのが、とても印象的だった。活字は読む人の想像力任せだが、映像は具象的であり、演じる人（演じさせる人）が決定的だからだ。



緒形拳さんと佐木館長

目次

○ 映画の原作者……………	1	○ 佐木隆三対談……………	6
○ 第8回特別企画展		○ 第13回「自分史を語ろう」松永武さん	
「文学と格差社会 樋口一葉から中上健次まで」……………	2	○ 第14回「自分史を語ろう」田中種昭さん	
○ 文学講座		○ 自分史文学賞 受賞作品決定！	
○ 川上未映子さん講演会「樋口一葉に出会った日」……………	3	○ 榎山荘子ども俳句大会表彰式と作品展……………	7
○ 島田雅彦さん講演会「ヒーロー列伝 英雄像のいろいろ」…	4	○ 川柳作品展	
○ 日中韓東アジア文学フォーラム 2010 in 北九州開催……………	5	○ 第9回特別企画展「映画の中の日本文学-昭和編-」	
○ 「日中韓東アジア文学フォーラム 2010 in 北九州」		○ ごあんない……………	8
協賛パネル展開催		○ 自分史ギャラリー展示替えのお知らせ	
○ 2011年収蔵品展 ～北九州の歌人たち～		○ 与謝野晶子短歌文学賞表彰式のご案内	
		○ 資料寄贈者・提供者・受贈雑誌一覧	

◆ 第8回特別企画展

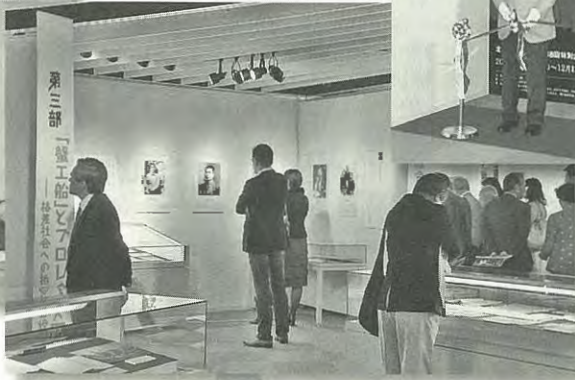
「文学と格差社会 樋口一葉から中上健次まで」

平成22年10月23日(土)～12月12日(日)

明治時代の樋口一葉から戦後生まれの中上健次まで、作家が「格差社会」をどのように表現したか紹介する展覧会を開催しました。



文学講座の様子
(講師：馬場美佳さん)



会場の様子



開会式 左より
佐木館長、曾田新太郎さん、
小林慎也さん、小正路淑泰さん

近年、「格差社会」という言葉が広く使われるようになりました。近代文学において、貧困やその中で生きる人々を描くことは重要なテーマのひとつでした。

本展の第一部「貧しい明治の庶民たち」では、樋口一葉、長塚節、石川啄木などが明治の底辺に生きる人々を描いた作品を紹介しました。

第二部「社会思想の目覚め」では、幸徳秋水や堺利彦、大杉栄とその妻伊藤野枝など、社会主義・無政府主義者たちの活動を取り上げました。一時、八幡に住んだ竹久夢二の秋水らとの交流も紹介。また、門司出身のアーネキスト詩人・中浜哲についても展示しました。

第三部「『蟹工船』とプロレタリア文学」格差社会への抵抗と挫折」では、小林多喜二や葉山嘉樹、徳永直、中野重治、佐多稲子など、プロレタリア文学の作家と作品を紹介。

第四部「底辺からの視線—大正・昭和の格差社会から」では、葛西善蔵、嘉村礒多、林芙美子、松本清張、安岡章太郎、中上健次などの作家が、貧困や差別などの問題をどのように描いたか

紹介しました。

また、筑豊の文化運動誌「サークル村」と、活動の中心となった上野英信、谷川雁らを紹介するコーナーも設けました。

一葉の「たけくらべ」「ごりえ」の原稿や草稿、啄木の自筆歌稿、多喜二の「蟹工船」原稿など、貴重な自筆資料が並びました。文学が描き出した「格差社会」が、現在、そしてこれからの社会へどのような影響を与えていくのか、作家からのメッセージを感じられる展覧会となりました。

展示資料約150点
入場者1412人
(館外イベント含む)

++++++
来館者の声
++++++

◇樋口一葉の自筆原稿に感激。字が綺麗なことに驚きました。かなり推敲が加えられていることも良く分かりました。
(40代・女性)

◇プロレタリア作家、特に小林多喜二の資料が充実していて興味深かったです。(40代・女性)

◇よくここまで原稿や初版本が集められていると感心しました。
(70代・女性)

◇現在の状況や問題に合ったテーマで良い企画だと思います。
(60代・男性)



文学講座の様子
(講師：松原新一さん)

++++++
文学講座
++++++

文学研究者の方々から、展覧会に関連する作家についてお話しいただきました。

◎10月30日(土)
佐木隆三
(作家、北九州市立文学館館長)
「小説が語る真実—自著『小説大逆事件』について」

◎11月20日(土)
馬場美佳さん
(北九州市立文学館准教授)
「本当の「格差」とは何か?—樋口一葉が見つめた近代」

◎11月27日(土)
波瀾剛さん(九州大学准教授)
「不安の予先—昭和モダンを手がかりに」

◎12月4日(土)
松原新一さん
(久留米大学名誉教授)
「人は働くために食う。だが、しかし—上野英信『地の底の笑い話』について」

◎12月11日(土)
今川英子(北九州市立文学館副館長)
「大正から激動の昭和へ—林芙美子作品にみる世相と庶民」

川上未映子さん講演会

「樋口一葉に出会った日」

12月6日(月)

本展の開催を記念して、芥川賞作家で、ミュージシャン・女優としても活躍する川上未映子さん、一葉との出会いについてご講演いただきました。

日大の通信課程で勉強していた頃、年に一回スクーリングがあり、東京に行つて授業を受けられるんですね。一葉と「たけくらべ」に出会つたのはその授業です。原文で読むんですが全然歯が立たない。でもここに来ての知れない感動があるに違いないという直感がありました。本屋で松浦理英子さんの現代語



講演中の川上未映子さん

訳を見つければ、その日のうちに「たけくらべ」を全部読みました。それまでの読書体験は、物語への感想が主でした。でも「たけくらべ」の場合、あらずじは全く入つてこないんです。文体や語っている人の視点など、言葉で説明できないような感想が残る異様な体験でした。それが十九歳の時です。目で読んでいのに体が動くような感じ。何かを飲まされているような感じ。読点でつないでいく独特の律動があるんですね。

一葉の父は百姓でしたが、何とか武士の地位を得ます。士族の娘にふさわしく教育を与えようと、一葉を歌塾「萩の舎」に入門させます。しかし父が亡くなつてしまい、一葉は娘なのに息子の働きを要求されることになりません。

「萩の舎」はサロンの集まりで、生活を切り詰めて来ている人は少なく、一葉は格差を感じていました。しかしそこで才能を認められ、文章で収入を得ることができれば万事OKだと気づきます。自分を表現したいことが最大の動機ではない。稼がないといけない状況でした。

一葉は、新聞記者で小説家、編集者でもあつた半井桃水に師事します。しかし書くものはなかなか採用されません。この頃の作品は、「奇跡の一年」と呼ばれる時代の作品に比べるとまっかみ合っていないというか、面白くありません。そのうち二人の仲がスキャンダルとなり、耐えられなかつた一葉は桃水から離れます。

遊郭のあつた界限で雑貨屋を開くことになり、一葉はそれまで経験したことのない世界にじかに触れます。その世界の女性達は、働いても働いても楽にならないし、のつびきならない状況にいます。一葉は自分を重ね合わせていました。そういう場所

に身を置く女性をたくさん書くことになり、才能が開花します。

「たけくらべ」の主人公美登里は活発で明るい女の子で、姉の大巻は遊郭で人気の花魁です。その頃は絶対的なヒロインキーがあつて、男の人が一番偉いんですね。でも遊郭では女が、花魁が一番偉い。この入れ子状態にも私はシンパシーを感じました。世界は一つじゃないんだと。価値観や、自分の中のチャンネルを一つでも二つでも多く持つと、この世界は一面しかないんだという考えがこつけいに思える、そういう物の見方ももたらしてくれました。

遊郭の界限で暮らす子どもたちの話で、恋とか愛とかいう言葉は一切使わずに、少年少女のほかない一瞬の想いを描いた名作だといわれます。私の小説「乳と卵」も影響を受けました。

私たちは、自分のかみ合わせ以外では物を食べられないですよ。それぐらい人の身体は遠いものなんです。でもいったん人の感覚に身をゆだねてしまうと、その感覚をなぞつて物事を見たり、描写を追つていくことがこんなに快感なんだつていう。それが凝縮された読書体験になることが、一葉の真骨頂じゃないかと思えます。

小説を読む時、作家について知ることはどれぐらい必要か常々考えています。インタビューつて本当に必要なのか。でも人間は共感をしなければ心は動きませんよね。その共感、私たちにそれぞれ差があつて、置かれている状況も全然違うけれども、だからこそ何か通じ合うところがあるんじゃないかという思いで、違う人間が書いたりしゃべつたりしていることを知りたいという気持ちから起こり得るんだと思います。

私は一葉がどういう境遇で書いたのかほとんど知らずに小説そのものに出会うことができました。その後一葉の人となりを知ることで、自分が働かざるを得ない状況で育つてきたので、励みももらいました。十九歳で、世界に対して何も自分の武器を持つていない時に、一葉という人と作品に同時に出会えたことは、私にとつて僥倖というほかない体験でした。(抄)

北九州芸術劇場中劇場
参加者1272人

参加者の声

◇川上さんが、とても誠実な書き手であり、読み手であることが伝わってきました。
(20代・男性)

◇松浦訳「たけくらべ」の朗読が素晴らしい、読んでみたくなりました。
(40代・女性)

◆文学館開館4周年・

日中韓東アジア文学フォーラム in 北九州開催記念

島田雅彦さん講演会

「ヒーロー列伝

英雄像のいろいろ」

12月2日(木)

文学館の開館4周年、日中韓東アジア文学フォーラム in 北九州開催を記念して、作家で同フォーラム実行委員長の島田雅彦さんにご講演いただきました。

文学館の開館4周年、日中韓東アジア文学フォーラム in 北九州開催を記念して、作家で同フォーラム実行委員長の島田雅彦さんにご講演いただきました。

文学作品を私なりに乱読してまいりましたが、それぞれの作品が書かれたモチベーション、

常には激しい生存競争が行われてきた中国やヨーロッパでは、マッチョなヒーロー像が主流になります。

どうしてこの作品が書かれたのか、という動機の点から考えてみると、いくつかに分類できると思いました。その動機のひとつに、「英雄になりたい」という切なる願いがあります。

ところが日本は、大陸に比べると比較的、平和な時代がメインでした。もちろん戦国時代もあつたけれど、歴史の期間においてはそれほど長い期間に及んではいません。むしろ、平穏な時代が長く続いています。それゆえに、他の世界とは違うヒーロー像が生まれました。

書く人間はなかなか英雄になれないものです。せめて書くことによって、その栄光に辿り着きたいのだと思います。時代を代表するヒーローの事績、偉業を記録しておくことで、自分もヒーローになりたい。それが文学作品の書かれる大きな動機です。ゆえに古今東西の文学作品

その代表的なキャラクターが、光源氏。つまり、色好みでヒーローということになるかと思えます。光源氏がどれほど特殊な日本のヒーローか分かってきた。だからこそ、マッチョな

色好みのヒーローとして、ドン・ファンを挙げたいと思いません。

も和気あいあいとしているし、彼に女性を寝取られた側の男性からも嫌われない。

ドン・ファンは、スペインに現れた、「女たらし」のシンボリック的存在です。女性を「獲物」ととらえる狩猟民。各地を転々としながら、同じ地には二度と戻つて来ない。ヨーロッパ全域を移動のエネルギーでもつて征服しようとする男です。

作者が男性であるドン・ファンを男性が産み落とした怪物だとするならば、光源氏は女性が育んだ理想化された男性像です。女性たちの理想をサンプリングした結果、作り上げられたキャラクターが光源氏です。名実ともに、女性の産物です。

これに対して光源氏は、狩猟的というよりは農耕的です。どういう意味かという、もちろんいろいろな女性のもとを訪ねて帰つて行くけれども、敵を作らない。誰かの恋人である女性と関係を持つたとしても、何故かその後、女性の恋人の男性と仲良くなつてしまふ。これまで付き合ひのあつた女性は全員、自分の屋敷に住まわせ、女性同士

私たちは一昨年(※講演会当時)、「源氏物語ミレニアム」というものを迎えて、この日本が誇る文学的世界遺産の価値を再認識したばかりですが、この光源氏のようなヒーロー像は、世界標準的なそれと比べると、極めて特殊であることは間違いありません。

光源氏のようなヒーロー像は、世界標準的なそれと比べると、極めて特殊であることは間違いありません。

光源氏的なヒーローを世界化、具現化しようとするのは困難でも、大変意義があることだと私は思います。



講演中の島田雅彦さん

現代に平安時代のままの光源氏であることは難しいと思いま

すが、日本人がヨーロッパなどの影響を受けつつも、やはり回帰してくる、最終的に戻ってくるヒーローの原型がそこにあるように思えてならないのです。

参加者 346人

参加者の声

◆素敵な人柄、素敵なお話で、先生がヒーローに見えました。(20代・女性)

◆島田さんの魅力にふれることができ、満足です。作品にもふれたいと思いました。(30代・女性)

◆おもしろい視点でのヒーローの話が聞けて楽しかった。(50代・女性)

◆日本的なヒーローが光源氏というところから、日本が世界にとるべきスタンスにつなげていったところが面白かった。(50代・男性)

◆本当に痛快なお話だった。(60代・男性)

◆心から若返りました！(70代・女性)

▲「日中韓東アジア文学
フォーラム2010
in 北九州」

12月4日(土)
～5日(日)

「21世紀文学の海へ!」いま東アジアをどう書くか」をテーマとして様々な意見交換がなされました。

このフォーラムは、2008年に韓国で開催されたのに続き今回が2回目。

様々な問題を抱える3国ですが、参加者からは、文学を通じて信頼関係を深めたいとの意見が相次ぎ、友好的で意義あるフォーラムになりました。

プログラム

基調報告

- 第1セッション 「貧富と欲望」
- 第2セッション 「場所の想像力」
- 第3セッション 「恋愛と文学」
- 第4セッション 「まとめ」



会場の様子

▲「日中韓東アジア文学フォーラム
2010 in 北九州」協賛パネル展開催

10月23日(土)
～12月12日(日)

「日中韓東アジア文学フォーラム2010 in 北九州」の開催に先立ち、協賛パネル展を開催しました(第8回特別企画展と併催)。

芥川賞選考委員であり、当フォーラム委員長を務める島田雅彦さんや、ノーベル文学賞に最も近いといわれる莫言(モイハン)さん(中国)など、日本から20名、中国からは8名、韓国からは10名がフォーラムに参加しました。いずれも各国を代表する錚々たる作家ばかりです。

その中でも芥川賞作家の平野啓一郎さん、映画監督で作家の青山真治さん、文学館主催「あなたにいたくたくて生まれてきた詩コンクール」で審査委員をしていたいただいた詩人の平出隆さん、同じく詩人の高橋陸郎さんなど様々なジャンルで活躍の文学者がいずれも北九州出身であり、それが縁で、フォーラムの北九州開催となったことは、とてもうれしいことです。今回のパネル展では、参加者



パネル展示の様子

のプロフィールをパネルで紹介し、併せて出版された最新作や代表作も展示しました。

フォーラム開催中には、参加した作家の方々が文学館に来館。パネル展示をご覧いただきました。

それまでなじみの薄かった韓国や中国の素晴らしい作家やその作品を、多くの市民に見ていただき、興味を抱いた方もたくさんおられたようです。

市民レベルでの各国間の相互理解の深まりは国家間のそれにつながっていくと思われまます。そういった点からも大変実り多きパネル展になりました。

▲二〇一一年収蔵品展
～北九州の歌人たち～

1月15日(土)
～4月10日(日)

今回の収蔵品展では、短歌の資料を中心に展示を行っています。

北九州では、1910年代ごろから、短歌のグループが生まれ、同人誌を発行するなど、活発な短歌活動が行われてきました。1917年には与謝野寛・晶子夫妻が訪れ、若松で講演を行いました。

若山牧水は妻喜志子と共に、1924、25、27年と三度北九州を来訪。彼らを迎えたのは、牧水主宰の歌誌「創作」に参加していた三苦守西・京子夫妻や、毛利雨一(うらひ)楼(ら)地元の歌人たちでした。毛利宅で牧水らが揮毫した寄せ書きや、牧水が守西に訪問の予定を知らせた書簡などを展示しています。そのほか、仰木実や浦橋七郎など、北九州で



会場の様子



若山牧水の書簡

活動した歌人の歌幅、短冊、歌集などのほか、「筑紫の女王」と呼ばれた歌人柳原白蓮の歌幅も紹介しています。

また、今年没後60年となる門司出身の作家・林芙美子の小特集を同時開催。自筆原稿や油彩の自画像のほか、横光利一、井伏鱒二、壺井栄ら作家から芙美子に送られた書簡などを展示。そのほか、新しく収蔵した豊津ゆかりの作家(堺利彦、小宮豊隆、葉山嘉樹)資料、北九州で発行された「豊前豆本」シリーズなども紹介しています。

2010年に逝去された麻生久氏(詩人、詩誌「沙漠」元代表)、栗田藤平(作家、「夢二を語る会」主宰)の追悼コーナーも設けています。

展示資料約250点

▲佐木隆三対談「自分史を語ろう」
第13回 ゲストは松永武さん

9月26日(日)



佐木館長と松永武さん

佐木館長がゲストの自分史に迫る「対談 自分史を語ろう」。
13回目は松永文庫室長 松永武さんをゲストにお迎えしました。
松永さんは幼少の頃から日本映画に親しみ、就職後も映画祭などを自主開催。また、自宅を私設図書館「松永文庫」として無料開放。約60年にわたって個人的に収集した映画に関する書籍やポスター等様々な資料を公開してこられました。その資料約12000点を北九州市に寄贈。これを受け平成20年、門司市民会館に「松永文庫」が開設。室長に就任されました。
松永さんには、ご自身のライフワークとなった映画への熱い思い、「映画研究家」ならぬ「映

画勉強家」だからこそ知る裏話などを語っていただきました。
佐木館長自身も、直木賞受賞作「復讐するは我にあり」が映画になったこともあり、盛り上がりを見せました。
(余談ですが、佐木館長は今村昌平監督による映画『復讐するは我にあり』で役者デビューをしています。ビデオでご覧になって探してみてください)

また松本清張の『砂の器』や金田一耕助でおなじみの横溝正史『八つ墓村』を監督した故・野村芳太郎さんとの交流についても語っていただきました。野村監督とは、家族ぐるみの交流を続けてこられ、監督の人生観は、松永さんにも大きな影響を与えたとのことでした。
話題は尽きないようでしたが、終演時間となってしまいました。続きが気になる方は、「松永文庫」協力の第9回特別企画展「映画の中の日本文学―昭和編―いつもそばには本と映画があった」にご期待下さい。

参加者117人

▲佐木隆三対談「自分史を語ろう」
第14回 ゲストは田中種昭さん

1月30日(日)

14回目のゲストは「筑前 染と織の美術館」館長 田中種昭さんです。
北九州市(旧・若松市)の職員として社会教育事業に携わった田中さん。40代の頃、当事収集していた富士山の柄が入った絵皿を求め、とある古美術店にたちよったところ、そこで富士山の絵柄の紺を見せられ、すっかり虜になってしまったとのこと。以来二十数年の歳月をかけて収集した染織物、古布のコレクションは約5000点。地元

の伝統文化の美しさ、素晴らしさを多くの人に知ってもらおうべく、平成3年に私設美術館「筑前 染と織の美術館」を開設されました。
当日は、数あるコレクションの中から選りすぐりの数点を、会場で披露。初めて見る人をも納得させる古布の美しさと魅力について語ってくださいました。か、来場者の皆さんをモデルに着付も実演してくださいました。

また、祖父母と生活をしてい

た少年期についても語っていただきました。田中さんのご両親は、いずれも幼少期に他界。以後父方の祖父母の下で育てられたとのこと。その頃の祖父母との思い出を感慨深そうに語られました。
話題が、明治期に活躍した司馬遼太郎原作のドラマ「坂の上の雲」にも登場して話題となった政治家・金子堅太郎(金子堅太郎は田中さんの大叔父にあたるそうです)に及ぶと、写真などを手に懐かしそうにその人柄を偲んでお話しくださいました。



田中種昭さん

参加者1153人

▲自分史文学賞
受賞作品決定!



自分史文学賞 表彰式の様子

第21回(平成22年度)北九州市自分史文学賞は、平成22年7月1日から9月30日まで作品を募集し、国内および海外より403編の応募がありました。
1月13日、最終審査会が行われ、大賞に、就職した八幡製鐵所での、高炉の操業の生き神様、田中熊吉翁との出会いや障がいを負った息子との交流を綴った小野正之さん(千葉県)の『鉄の時代を生き延びて』が決定。
ほかに、北山青史さん(山形県)の『ドナウ漂流』と藍友紀さん(神奈川県)の『父を恋う』が佳作、阿部敏広さん(愛知県)の『故郷』が北九州市特別賞を受賞しました。

▲ 檜山荘子ども俳句大会表彰式と作品展示

12月1日(水)
～28日(火)



表彰式の様子

実行委員会。静かに深まる秋空のもと、受賞した子どもたちの笑顔が響き合う表彰式でした。

その優秀作品の展示を、12月1日～28日に文学館ロビーにて行ないました。期間中は受賞者とその家族など多くの方が来館されました。自分の作品を見つけると、うれしそうにはにかんでいる子どもたちがとても印象的でした。

▲ 大賞

紫陽花と舞妓が歩く京の道

中学3年 江口文也佳

▲ 北九州俳句協会会長賞

風鈴が年中鳴ってた祖母の家

中学3年 細川知隆

▲ 文学館館長賞

あの雲は空をはつてるかたつむり

小学6年 川畑 孝治

▲ 杉田久女賞

うち上がる夜空にさいいた夏の花

小学6年 若林 良樹

▲ 橋本多佳子賞

滝つぼの七つに光る水しづき

中学2年 長澤 朱莉

小倉北区中井浜にあった俳人・橋本多佳子の自宅は「檜山荘」と称され、北九州の文化サロンとして杉田久女をはじめとする多くの文化人に親しまれました。

この跡地を整備した「檜山荘公園」で、杉田久女、橋本多佳子の作品や地域の歴史文化を子どもたちに伝えるとともに、その情操や表現力を高めることを目的に、子ども俳句大会が今年も開催されました。

数多く応募のあった中から優秀作品について、去る10月23日に檜山荘公園で表彰式を行ないました(檜山荘子ども俳句大会

▲ 川柳作品展

1月4日(火)
～2月27日(日)

川柳と俳画の作品展をロビーにて開催しました。

戦前より北九州を中心に活動している同人誌「川柳くろがね吟社」。今回はその会員の金子哲也さんの作品を展示しました。

・逢いにゆく心はずでに駆けている
・まっとうに生きてあしたを疑わず
・方言にとまどう旅もまた楽し

などの句と、軽妙なタッチの俳画を組み合わせた自筆の色紙が来館者の目を楽しませてくれました。



展示の様子

▲ 第9回特別企画展

「映画の中の日本文学―昭和編―」

いつもそばには本と映画があった

昭和期に公開された文芸映画の展覧会を開催します。各作品のポスター、スチル写真など映画資料に加え、原作の自筆原稿ほか、文学資料も紹介します。



*開催期間

平成23年4月23日(土)

～6月19日(日)

※月曜日休館

(5月2日は臨時開館)

*観覧料

一般 400円

中高生 200円

小学生 100円

(年間パスポートは適用なし)

展示構成

第一部「昭和」の幕開け

「日輪」横光利一(衣笠貞之助)

「伊豆の踊子」川端康成(五所平之助 ほか)

「春琴抄」谷崎潤一郎(島津保次郎)

「人生劇場」尾崎士郎(内田吐夢)

「若い人」石坂洋次郎(豊田四郎)

「愛染かつら」川口松太郎(野村浩将)

「結婚の生態」石川達三(今井正)

「次郎物語」下村湖人(島耕二)

「陸軍」火野葦平(木下恵介)

ほか

第二部戦争は終わった

「鐘の鳴る丘」菊田一夫(佐々木啓祐)

「肉体の門」田村泰次郎(マキノ正博)

「グッド・バイ」太宰治(島耕二)

「青い山脈」石坂洋次郎(今井正)

第三部もはや戦後ではない

「太陽の季節」石原慎太郎(吉川卓巳)

「ビルマの豎琴」竹山道雄(市川崑)

「挽歌」原田康子(五所平之助)

「雪国」川端康成(豊田四郎)

「水壁」井上靖(増村保彦)

「炎上」三島由紀夫(市川崑)

「人間の條件」五味川純平(小林正樹)

「飼育」大江健三郎(矢島道)

ほか

第四部北九州の文学と映画

トピック だから時代劇はやめられない

*企画協力 東京国立近代美術館フィルムセンター



「若い人」ポスター
(1937 豊田四郎監督)

いあんない

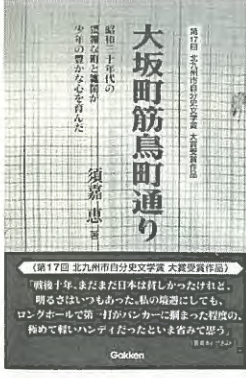
自分史ギャラリー

展示替えのお知らせ

平成23年4月23日(土)
～平成24年4月8日(日)

北九州市自分史文学賞受賞作品の紹介コーナーを展示替えします。

平成23年度の紹介作品は、第17回(平成18年度)大賞と北九州市特別賞をダブル受賞した須嘉恵さんの『大坂町筋鳥町通り』です。自らの親子関係を軸に、昭和30年代の小倉の街を写した作品です。当時の町並み写真や資料を交え、作品の魅力を紹介します。



須嘉恵『大坂町筋鳥町通り』
(学習研究社 2007.6)

与謝野晶子短歌文学賞表彰式のご案内

与謝野晶子短歌文学賞の表彰式(産経新聞社主催、文学館共催)が7月16日(土)に北九州国際会議場にて開催されます。16日は表彰式及び、入賞・入選作品について、選者各氏が講評する選評会を開催。さらに、

表彰式開催を記念して、歌人の馬場あき子さん、永田和宏さん、伊藤一彦さんによる特別鼎談会(テーマ「近代・現代の恋の歌」)も行なわれます。

(一般の方も参加できます。詳しくは後日市政だよりにてご案内いたします。)

翌17日には篠弘さん、伊藤一彦さん、今野寿美さん、永田和宏さん、永田紅さんによる歌会も行なわれます。

詳しくは、産経新聞社ホームページをご覧ください。

<http://www.eventscramble.jp/cats9/17.html>



与謝野晶子

資料寄贈者・提供者

寄贈者・提供者

- 赤とんぼ通信社 秋吉久紀
- 夫 有森信二 安間隆次
- 池田美保 石川一步 市川市文学プラザ 一丸旅人
- 伊東静雄顕彰委員会 茨城県常総市・節のふるさと文化づくり協議会 今村元市 入江春行 大岡信ことば館 大佛次郎記念館 荻原稔 奥陸美 加来宣幸 柏木恵美子 神奈川近代文学館 鎌倉虚子立子記念館 鎌倉文学館 香美市立吉井勇記念館 狩北九州北斗句会 河合宏 川内まごころ文学館 北九州文学協会 雲岡処平 高知県立文学館 小おりやま文学の森資料館 重信幸彦 品川洋子 杉八千代 世田谷文学館 添田裕吉 鷹取美保子 竹田徹 田辺むつみ 土屋文明記念館 鶴岡市立藤沢周平記念館 徳島県立文学書道館 富田正吉 中川岨城子 永田喜久男 中山仁美 西田英樹 西日本文化協会 日本近代文学館 能村研三 野見山ひふみ 花田理枝 葉山修平 姫路文学館 廣崎靖邦 福岡県詩人会 福

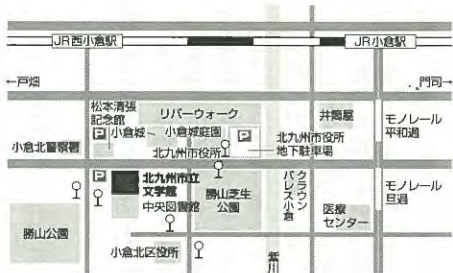
- 岡市文学館福岡ユネスコ協会 福本弘明 ふくやま文学館 古河歴史博物館 古谷龍太郎 Beate wonde 星野充伸 町田市民文学館 ことばらんど 松永武 三鷹市山本有三記念館 村山寿朗 森鷗外記念会 森本美鈴 柳生じゅん子 安成元子 矢鳴豊子 山口公和 与謝野晶子文芸館 吉田花芽子 吉備路文学館 若窪美恵 渡邊和子

提供雑誌

- Avanti 青嶺 馬酔木 あしへい 穴生文芸 あまだむ あん 色鳥 海 沖 海峡派 火山地帯 風の森 河伯洞だより 花粉期 九州文学 九大日文 雲 群炎 月刊俳句界 月刊みんぱく 玄海 沙漠 自鳴鐘 周炎 人権の文化 船 団 川柳あやめ 川柳くろがね 川柳むらさき 鷹 天山牧歌 天籟通信 とびうお 菜殻火 梅光文芸 橋 ひびき ひろば北九州 ふだんぎ北九州 べだる窓 Michari 耳空 民博 通信 與謝野晶子研究 (五十音順・敬称略)

貴重な作品を続々復刊 文学館文庫 好評販売中!!

- ①「大野葦平 岩下俊作 劉英吉 集」(1,000円)
- ②「林 美英子 短編集」(1,000円)
- ③「杉田 久女 句集」(700円)
- ④「大野葦平 美穂兵隊 山重軍監」(1,000円)
- ⑤「橋本多佳子 句集」(700円)



- JR小倉駅より徒歩15分
- JR西小倉駅より徒歩10分
- 勝山公園バス停より徒歩1分
- 北九州市役所前バス停より徒歩2分
- 北九州市都市高速大手町ランプより2分
- 駐車場は文学館裏の各有料駐車場をご利用下さい



発行 2011年4月1日
北九州市立文学館
〒803-0813
北九州市小倉北区内4-1
TEL 093-571-1505

開館時間

火～金 9:30～19:00 (入館は18:30まで)
土・日・祝 9:30～18:00 (入館は17:30まで)

休館日

毎週月曜日(月曜日が休日の場合は翌日)
年末年始